

2019年度 学生満足度調査 結果報告（全体）

2020年3月

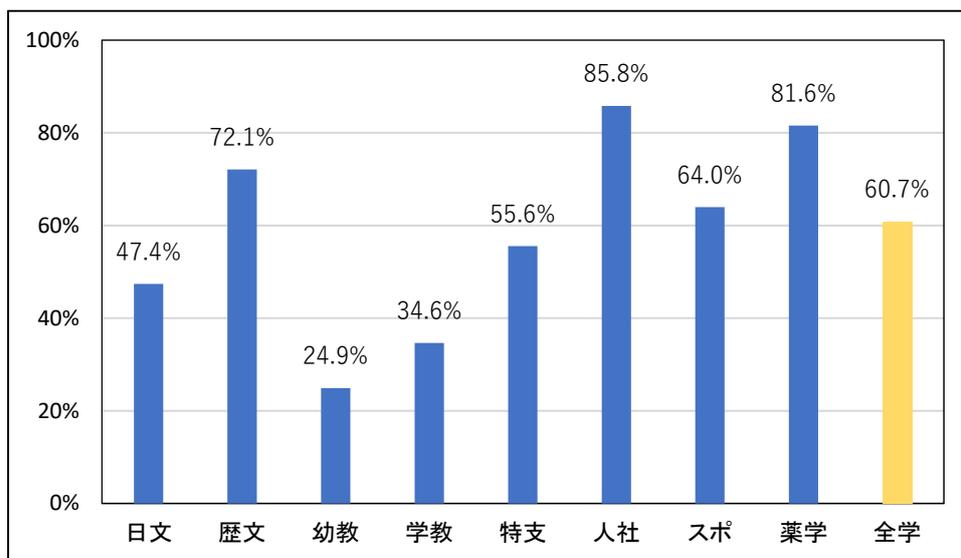
IR委員会

【調査結果の概要】満足度調査としての実施は今年度が初めてである。過去、H26、H28は学生委員会が単独で、昨年度はIR委員会が学生委員会と協力して学生生活実態調査を行ってきた。昨年度からは、調査方法をmoodle上に設定したWebアンケート方式に変更した。そのため、過去のデータと比較することは困難となった。一方、各問でその選択肢を選んだ理由を自由記述で記入する欄を多く設定した。このことで、不満や困り感の詳細が具体的に浮かび上がるといった効果も現れてきた。今後は、本年度の調査を基本に、大学への満足度を的確に把握することができるように、調査を改良していきたい。

[1. 基本的分析]

【調査の回収状況】

回答率（2019年度）



<参考>【昨年度の回収状況】

	対象者数(人)	回答者数(人)	回答率(%)
全学	3077	2062	67.0

<考察>全学の回答率は、昨年度に比べやや低くなった。今回は、11月25日(月)～12月20日(金)の期間に文科省の「全国学生調査(試行実施)」が行われた。昨年度から事前のアナウンスはあったが、具体的な日程の通知があったのは、本学の学生満足度調査の開始とほぼ同じ11月初旬で

あった。そのため、本学の調査の期間が終了した後に「全国学生調査」の回答を依頼することとした。学生にとっては、類似の調査(両方とも Web 方式であり、文科省のそれは、スマホからの回答を前提としたレスポンスデザインになっていた)が続くことになり、負担感が大きくなると予想された。同時に、指導を依頼するゼミ、アドバイザー教員にも負担増となるため、教育・学習支援センター準備室(本調査の取りまとめ担当部署:以下「教育・学習支援センター」)からの回答督促メール配信や指導依頼もやや控え気味であった。次年度は、私立大学等改革総合支援事業への対応(9月)を軸に、他の諸調査の開始時期も勘案し、調整を進めたい。

今回の調査では、学科(専攻)間の回答率に大きな差が出た。全体の回答率が比較的高くなったのは、薬学(690/846人)、人社(290/338人)の熱心な取り組みに支えられた結果である。両学科では、未回答者に対する個別の回答督促が丁寧に実施された。これには、「中間集計時点で未回答者がリアルタイムで把握可能になった」「督促された際、すぐにスマホから回答できる」という Web 方式の長所が大きく貢献している。同時に、IR委員、ゼミ、アドバイザー教員の回答率向上への熱意がこの数値につながったと考えられる。

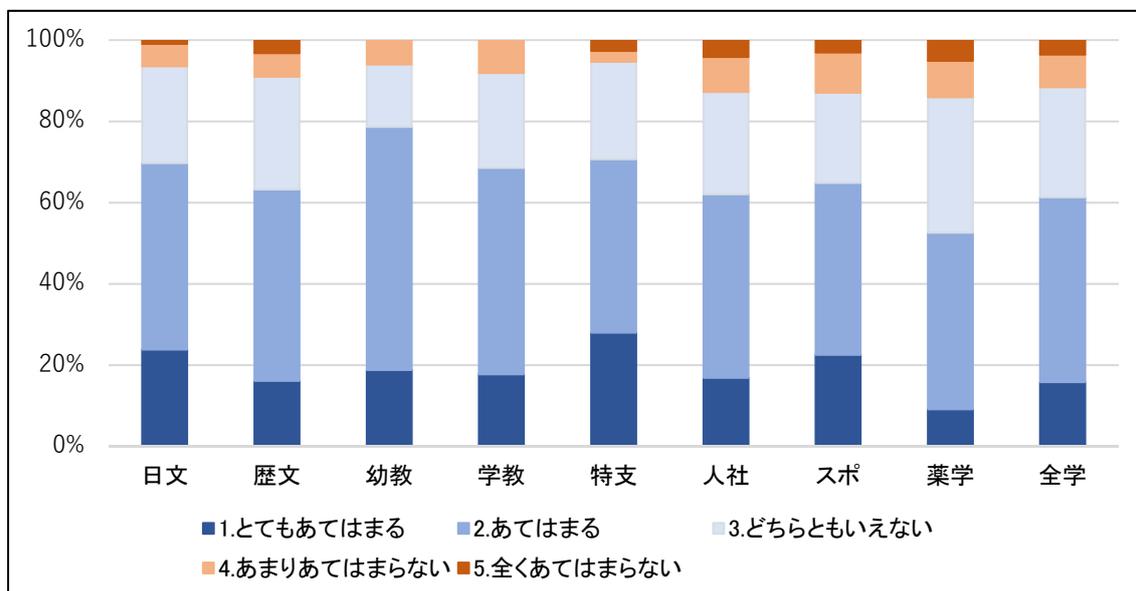
総ての調査で 80%以上の回答率が確保できるようになれば、ほぼ全学生について、個別の時系列データが参照可能になる。これは、教育・学習支援センターが掲げている“個別学修支援の推進”を実現するための極めて重要な基礎データとなり、学生個人へフィードバックして学修指導に活用できると考えている。調査に協力した学生に対しての誠実な対応として、収集・分析したデータを実際に活かすことが必要であり、より多くの学生よりデータを収集することが、分析・アドバイスの的確度を上昇させることにつながると確信する。今後も、80%以上の回答率を目標としていきたい。

以下の集計では、「総合的満足度を尋ねる」設問の場合は、学科間の比較をし易いように全学科・専攻のデータを並列に並べた。一方、「満足度の内訳を尋ねる」設問の場合は、観点による違いを比較するために、全学を合計して設問毎に並べた。

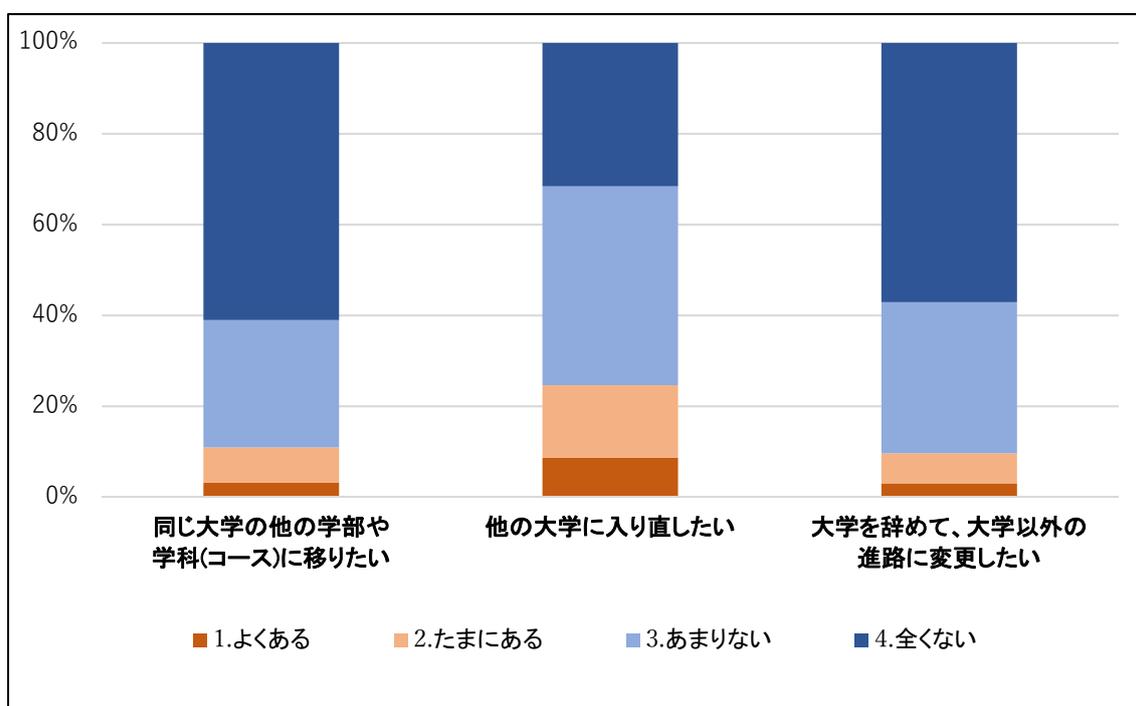
なお、満足度に関する設問の考察では、選択肢のうち「とても満足している」と「満足している」を併せて「満足群」、「あまり満足していない」と「全く満足していない」を併せて「不満足群」と呼んでいる。

【I: 本学への満足度】

本学に入学してよかった(総合的内容)



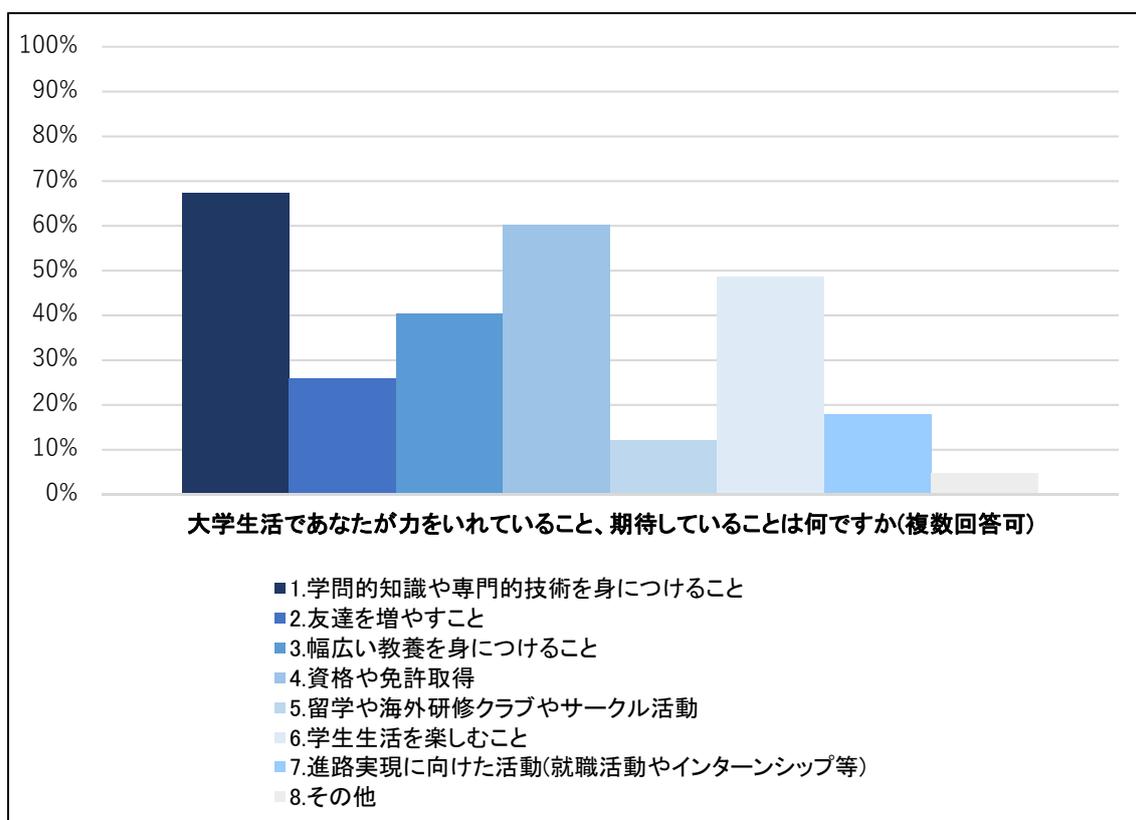
設問別集計(全学)



<考察>「本学に入学してよかった」という間に「1.とてもあてはまる」「2.あてはまる」とした割合が、全体で60%に達した。これは、新入生アンケートにおける「大阪大谷大学に入学して満足していますか」という質問に対する満足群の合計が2017年64.5%、2018年75.3%、2019年76.3%であることと比較すると、対象が全学年であること、どの学年も大学に慣れて学習が年度末に差し掛かってい

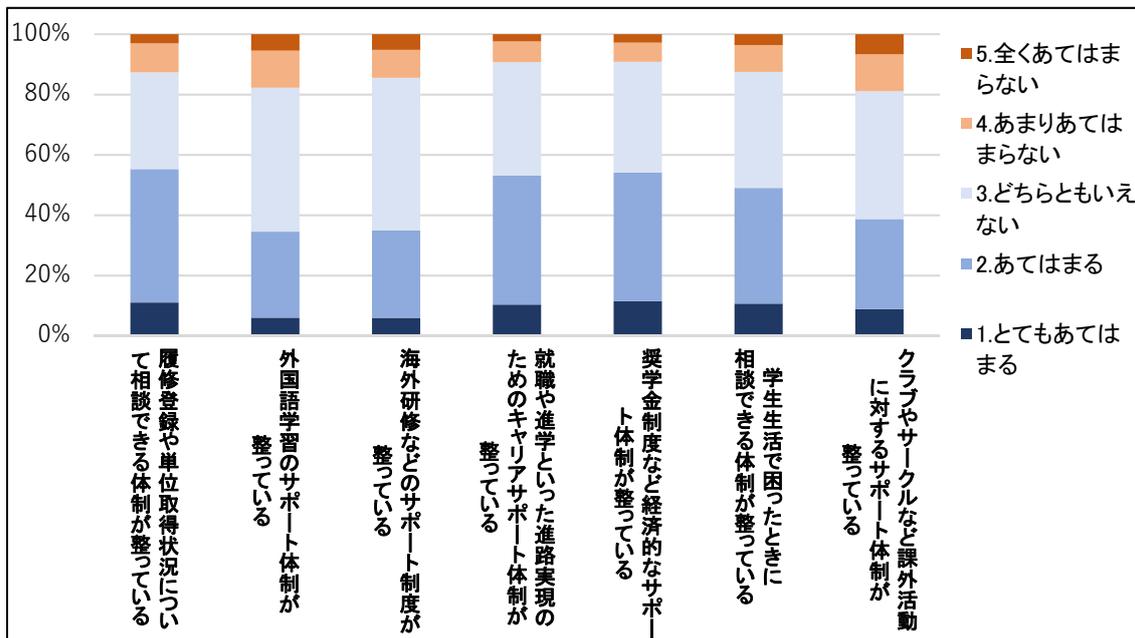
ることなどを勘案しても、十分に高いと言えるのではないだろうか。ただ、過去3回の新入時調査では「満足している」の値がいずれも30%を超えていることには留意する必要がある。一方、今回の学生満足度調査では「とてもあてはまる」の値は15.8%に減っている。設定された質問文と選択肢の表現が異なるため、今回はより踏み込んだ考察は行わない。今後は学年別の集計により学年進行に伴って低減すると言えるのかを検討すること、さらに、新入生アンケートと学生満足度調査を学生に紐づけて、満足度が大きく下がる学生に対する低下要因の調査・フィードバックも検討したい。

【Ⅱ：大学の生活で力をいれている事柄】

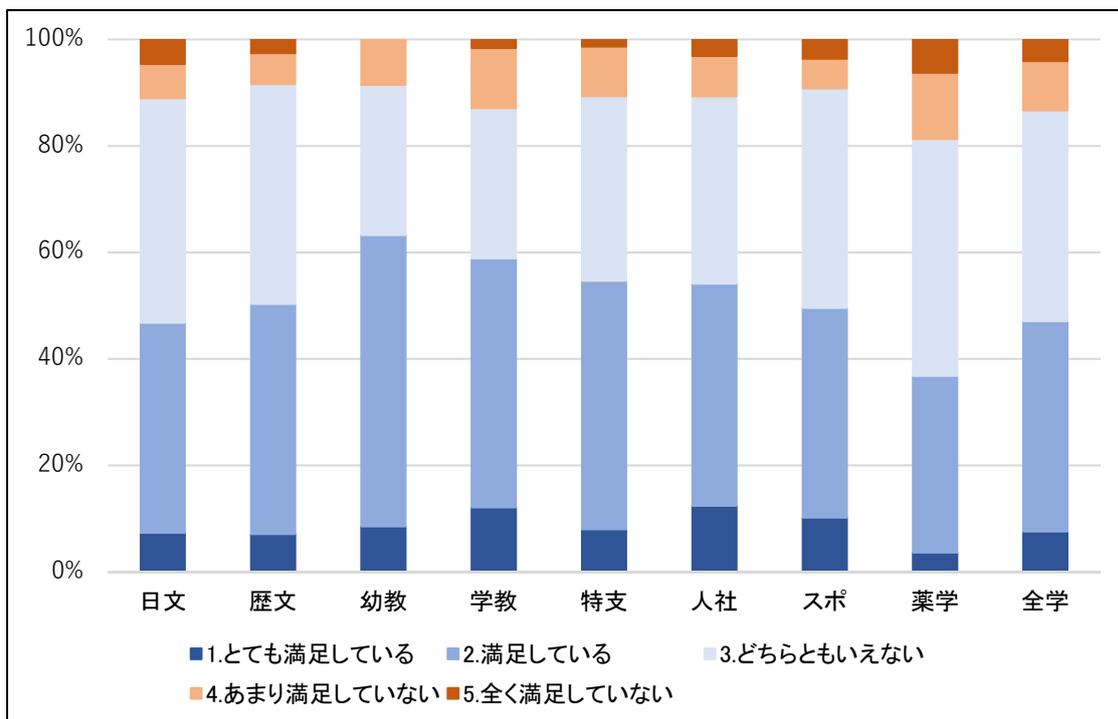


<考察> 学生は「学問的知識や専門的技術を身につけること」と「資格や免許取得」に関心が高い。また、この問いとともに、「日々の生活時間の何%を1～8の選択肢にあてているか」といった質問をすることで、学習への関心・意欲が明確になるのではないだろうかと考えている。例えば、「6 学生生活を楽しむこと」にどれくらいの時間を充てているのかを聞き、それが大学生としての学習時間を短くしていることにつながっているのではないかと考察する、ということである。

【Ⅲ：大学生生活のサポート体制への満足度】

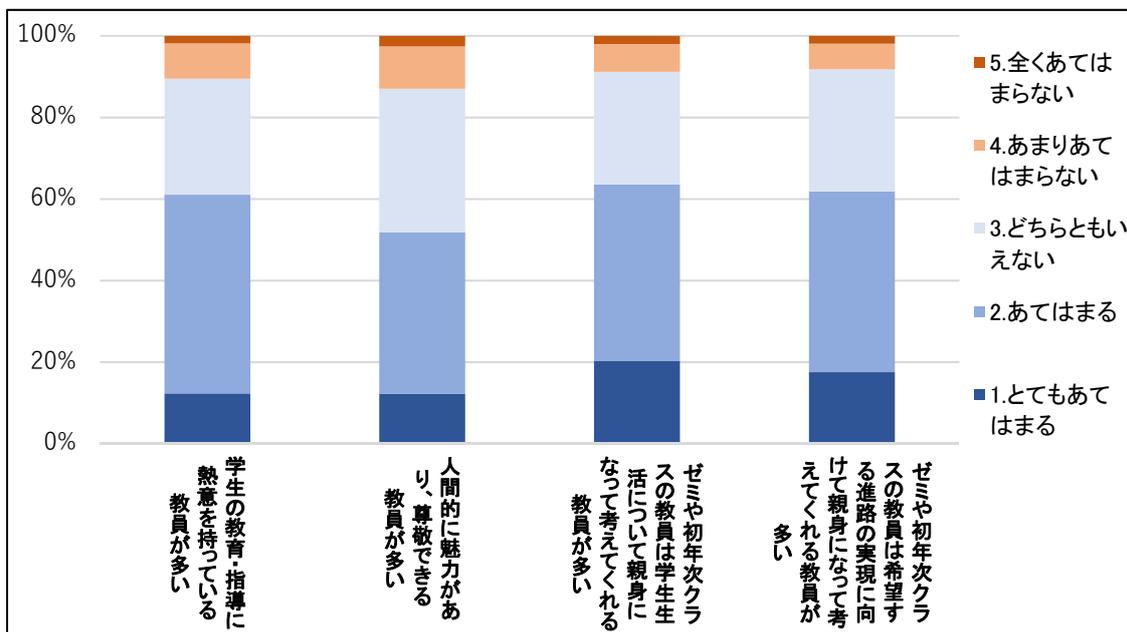


本学の教育・大学生生活のサポート体制に対する全般的な満足度(総合的内容)

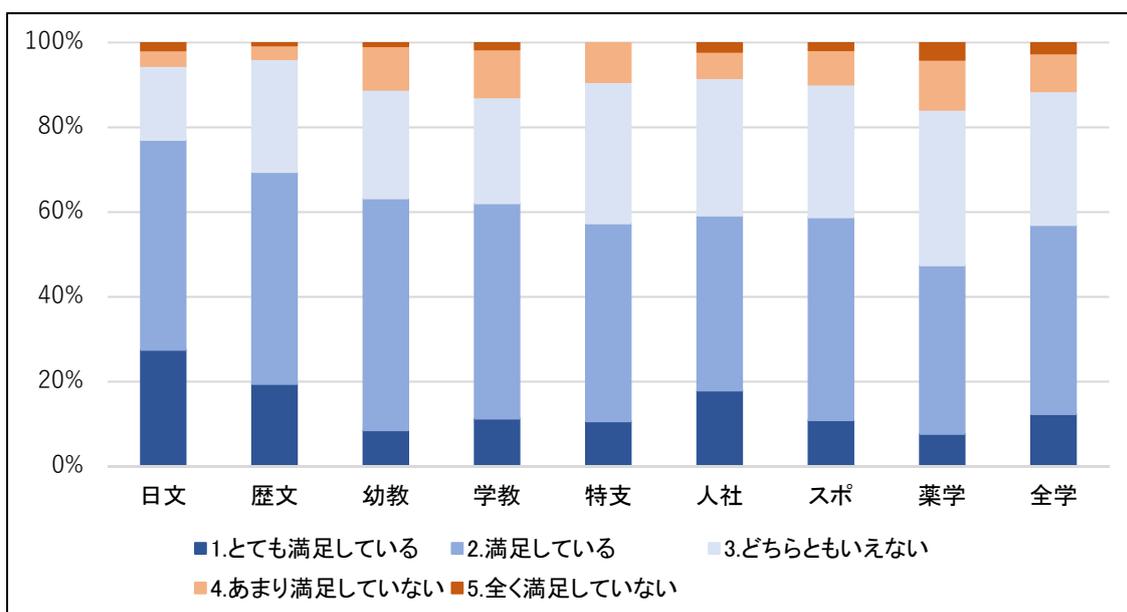


＜考察＞本学の教育・大学生生活のサポート体制に対しては、“概ね満足している”と判断される。薬学部の満足群が他学科に比べて少ないことが懸念される。

【IV: 教員への満足度】

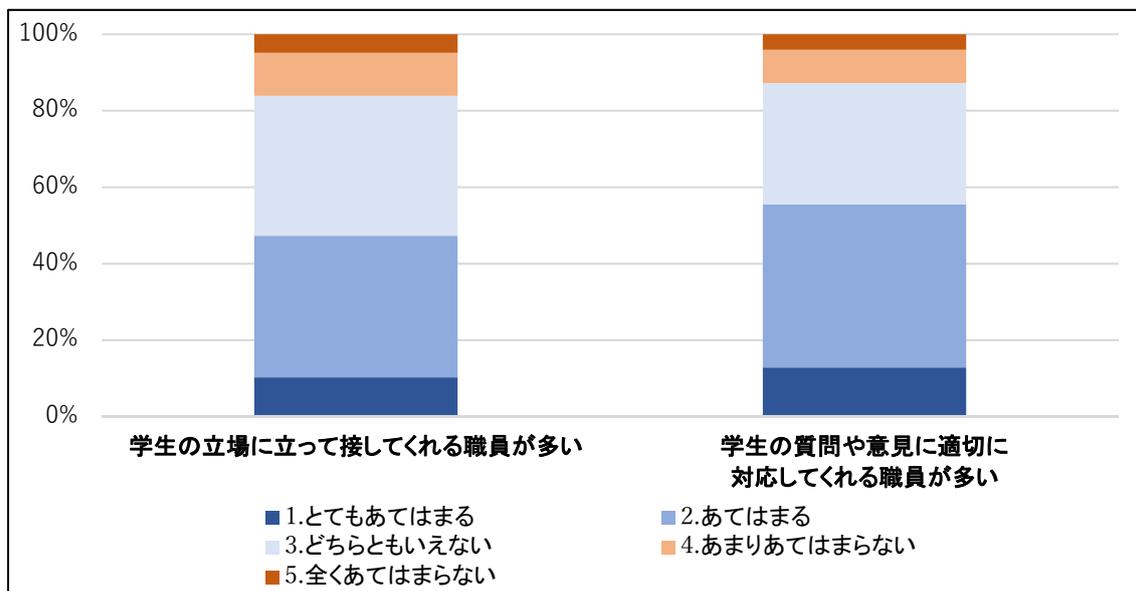


本学の教員に対する全般的な満足度(総合的内容)

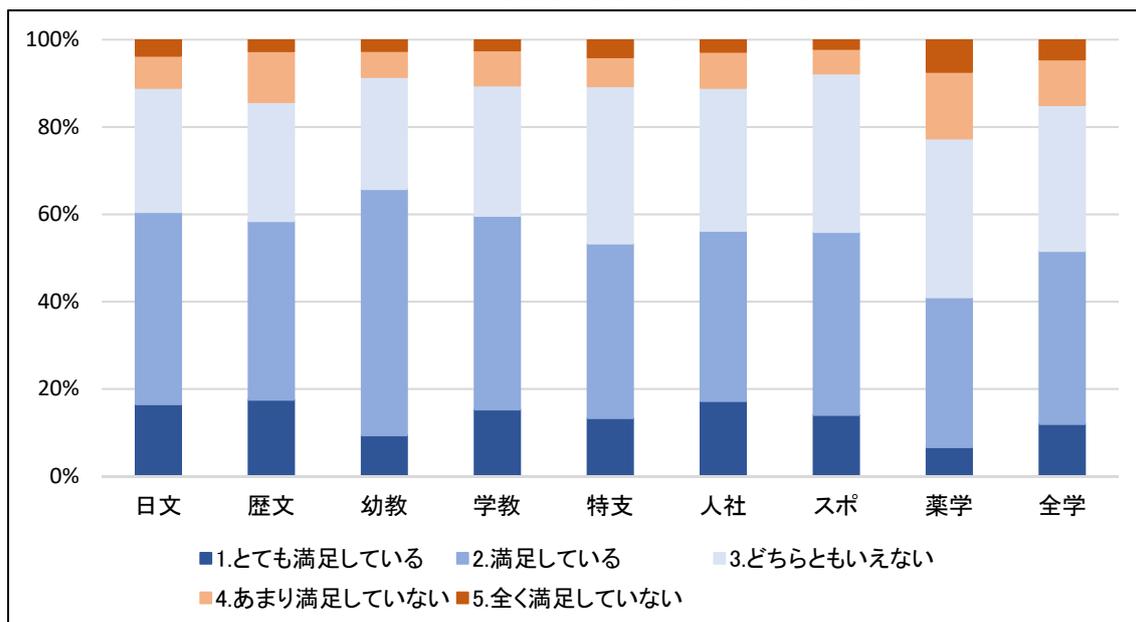


<考察> 全学の満足群が、57.0%であり、本学の教員に対する全般的な満足度は比較的高いと判断される。しかし、「本学の教員に対する意見や要望があればお聞かせください」という自由記述の設問に対しては、同一の要因によると思われる回答があり(同じ授業、教員に関するものが複数あった)、注目すべきである。また、授業評価アンケートで個別の授業に関する調査も実施しているので、その結果と関連付けて振り返りをする必要であると考え。

【V:職員への満足度】

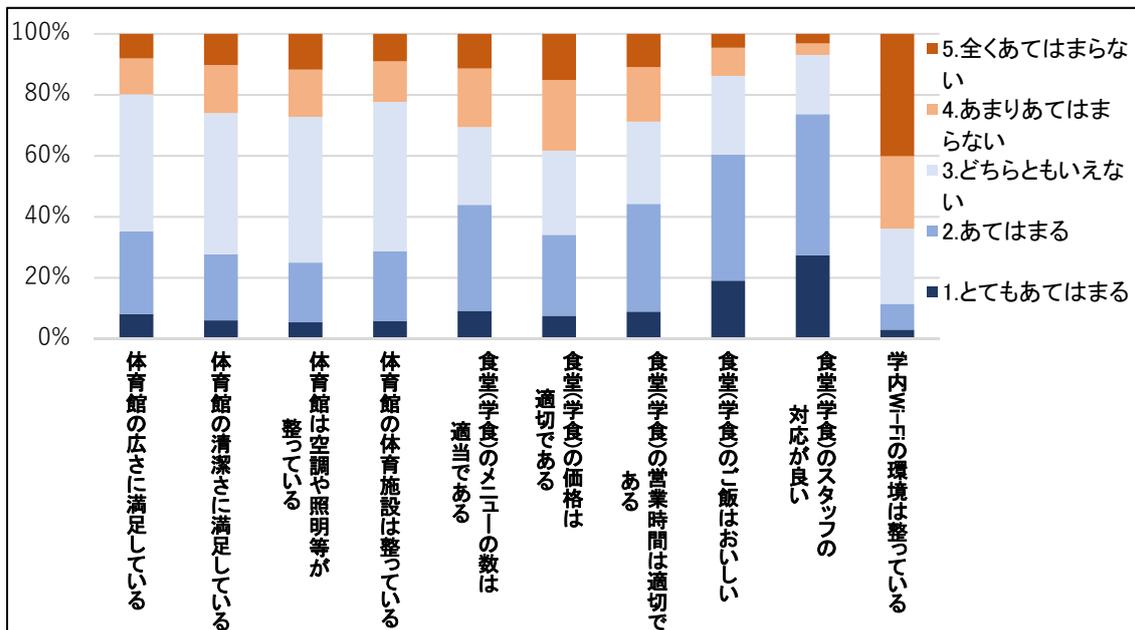


本学の職員に対する全般的な満足度(総合的内容)

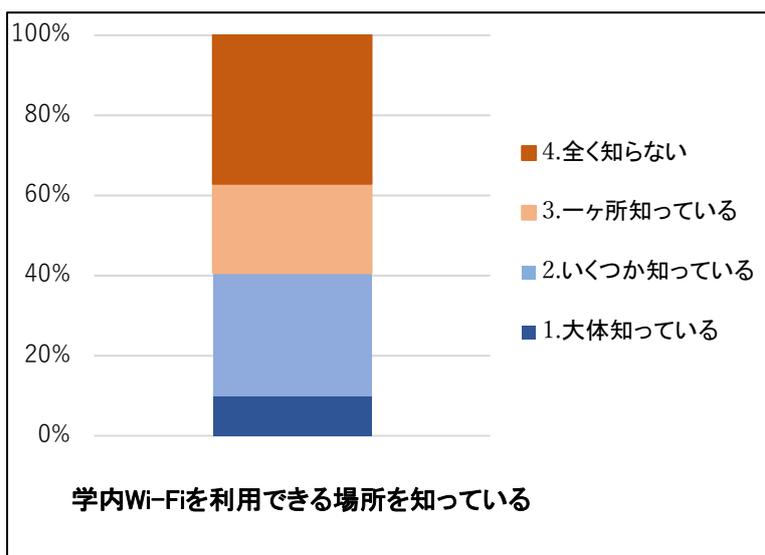


＜考察＞満足群が 51.6%であり、全体としては満足感が比較的高いと判断される。しかし、「本学の職員に対する意見や要望があればお聞かせください」という自由記述の設問に対する回答には、同一の要因によると思われる回答があり(同じ部署に関するものが複数ある)、注目すべきである。

【VI:施設・設備への満足度】

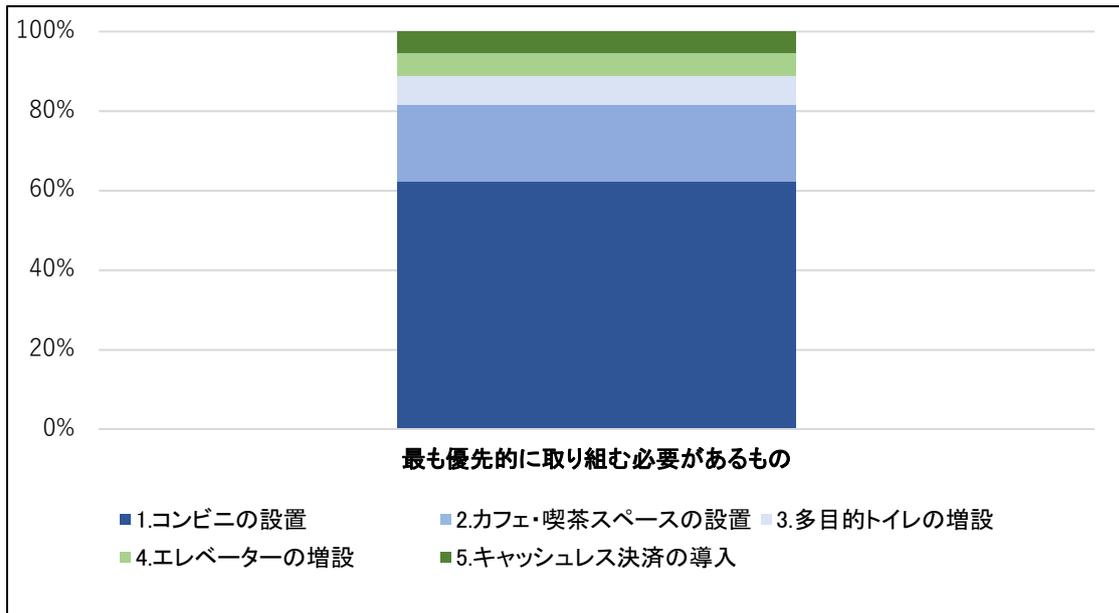
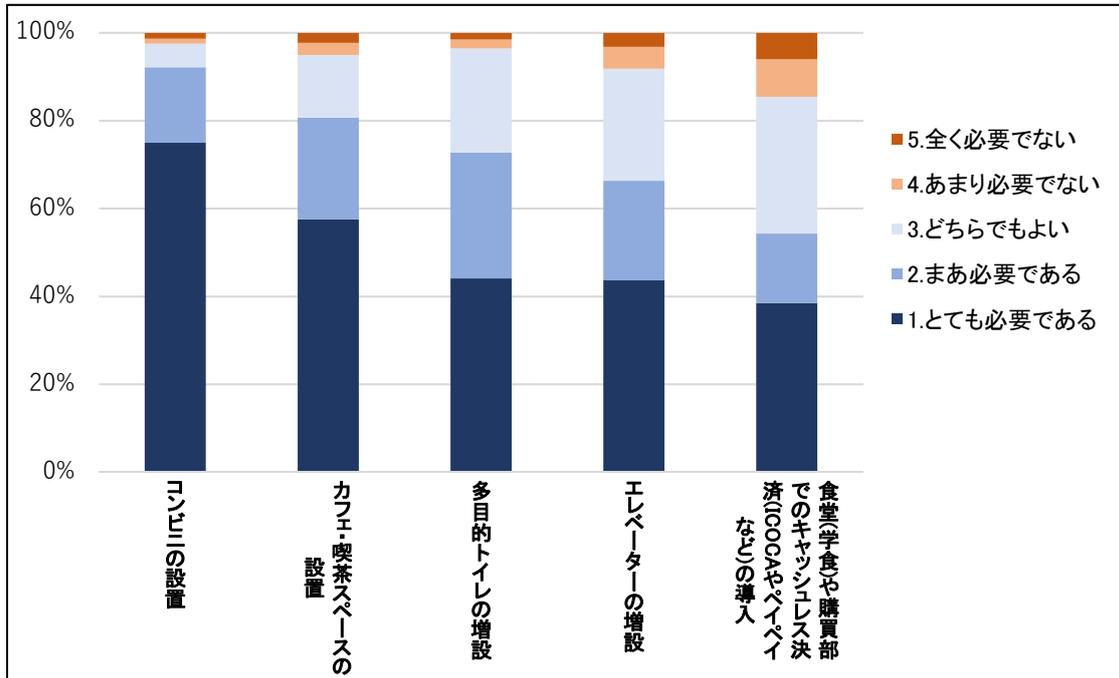


＜考察＞「食堂(学食)のスタッフの対応が良い(とてもあてはまる、あてはまる)」との回答が 73.7%に達していることは注目すべきである。学生視点では、大学スタッフと接触する場面や、その時間の長さは時系列的に並んでおり、接する時間の長さも異なる。食事の際に親切な対応をもらえることが、満足度に大きく寄与していると思われる。つまり、学生たちは時間差をおいて大学スタッフを相対比較することになり、昼食の場面(休息の時間)に切り替わった際の、印象の落差が満足度の違いが出た要因の一つとなっているのではないだろうか。



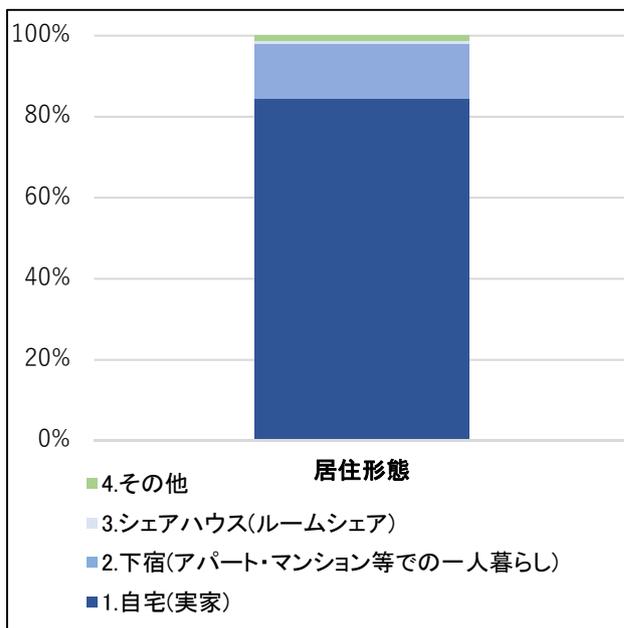
＜考察＞学内 Wi-Fi の利用可能な場所が増えてはいるが、このことが周知されていないと思われる。各期の授業開始時に、授業担当者から積極的に周知すべきである。

【Ⅶ:導入・設置が必要な施設や機能】

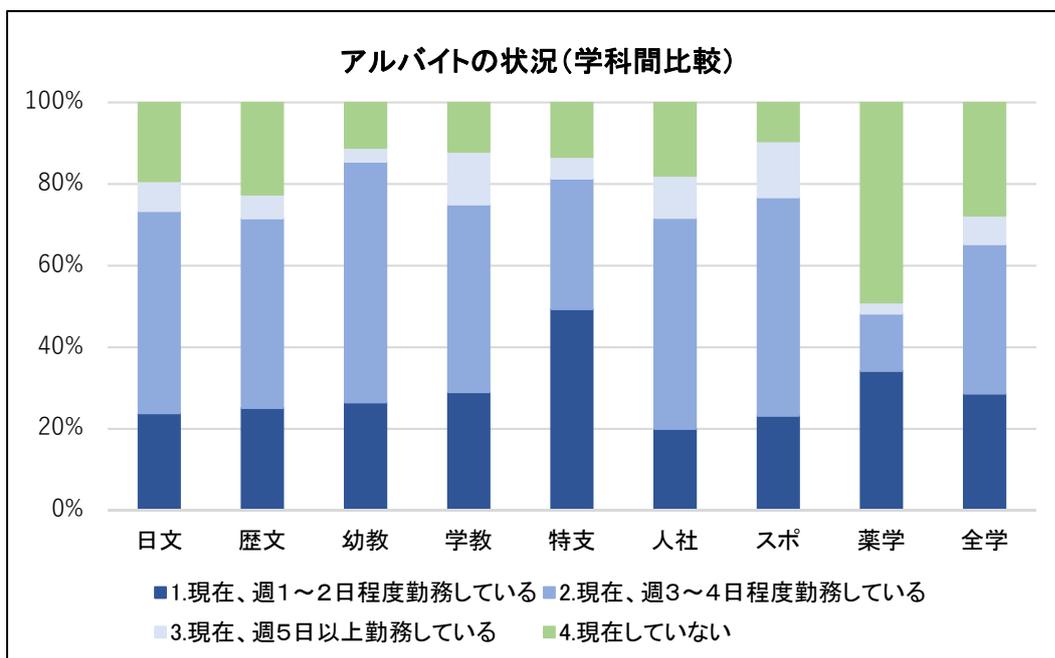


＜考察＞学内 Wi-Fi の充実を望む声は、非常に大きい。加えて、コンビニの設置も急務であり、キャンパス整備完成までこれらの要望を先送りしてよいか判断が迫られている。Ⅷの「普段どこで昼食をとりますか」の回答と併せて考えると、彼らの満足度を向上させるためには、「Wi-Fi 利用方法(設置場所)の周知」と「コンビニ設置」への取り組みが喫緊の課題である。

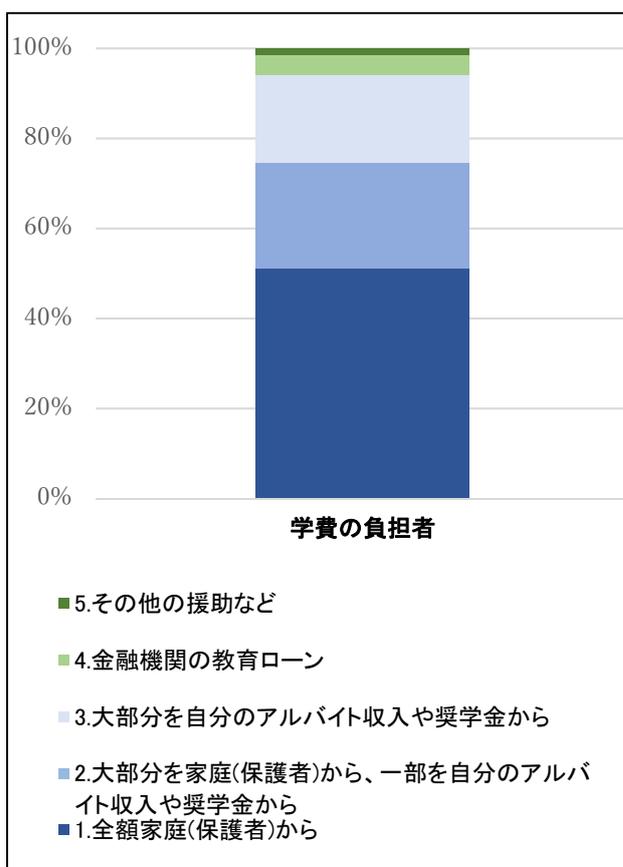
【Ⅷ：学生の生活形態等】



＜考察＞学生の8割が自宅から通っていることがわかる。地域密着型の大学であると言える。



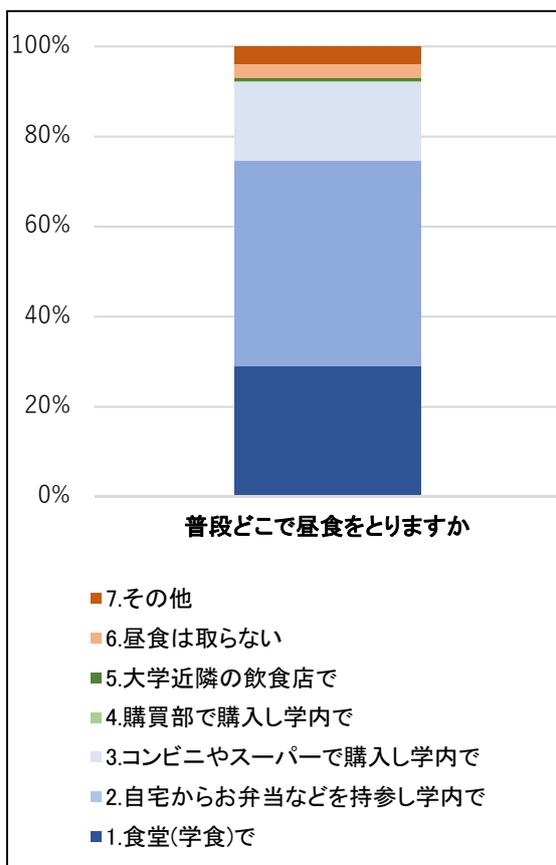
＜考察＞薬学科以外では、ほぼ8割の学生がアルバイトをしている。一方、薬学科では、49.0%が「現在していない」と回答しており、これは「アルバイトをすると授業についていけなくなる」という理由が大きいと考えられる。また、学校教育専攻、人間社会学科、スポーツ健康学科では「現在、週5日以上勤務している」と答えた学生が10%を超えている。この設問でのアルバイトには、「有償のボランティア活動」も含まれていると考えられるので、今後その内訳を知る必要がある。



＜考察＞学費の負担者は、「1 全額家庭(保護者)から」と「2 大部分を家庭(保護者)から、一部を自分のアルバイト収入や奨学金から」を併せると 74.6%になる。一方、「大部分をアルバイト代や奨学金」で学費を支払っているものは、19.5%であった。居住形態の設問と併せて分析すると、「自宅」から通学し、「週 1 日以上アルバイトをしている」が、学費を「全額家庭(保護者)」に払ってもらっているものは、全学で 29.1%である。アルバイト代を、家計に入金する場合もあるだろうが、多くは学生生活の充実のために使っているのではないかと推察される。

「自宅」から通学しているもののうち、学費負担を「1 全額家庭(保護者)から」と回答したものは、50.9%である。自宅生の学費負担は、「1 全額家庭(保護者)から」とそれ以外がほぼ半分であった。

近年学生より、「補講があるのでアルバイトを休みたいと思ったが、代わりの人が見つからないので、補講に出席できない。」という相談を受けることがある。大学の授業より、アルバイトを優先しているということではないだろうか。このことは個別学修支援における重要な課題だと認識している。



<考察>「1 食堂(学食)で」と答えた割合が 29.1%、「2 自宅からお弁当などを持参し学内で」と「3 コンビニやスーパーで購入し学内で」を合わせて 63.0%であった。一方で、Ⅶの設問では、「コンビニの必要度」が 74.9%に達しており、食堂(学食)で十分な食事をとれていないことが浮かび上がってきた。設問「食堂(学食)の価格は適切である」の選択肢「あまりあてはまらない」と「全くあてはまらない」をあわせると 38.3%、設問「食堂(学食)のメニューの数は適当である」では、「あまりあてはまらない」と「全くあてはまらない」をあわせて 30.6%である。学生は多様な選択肢を求めていると解釈される。

[2. 総合考察]

Web 方式の調査であるが、学科によっては 8 割を上回る回答率が維持されている。学外の研究会等では「Web 方式での調査は回答率が極端に低く、母集団の傾向を評価するための調査法として妥当性を欠くのではないか」といった報告が散見される。しかし、本学では教員・職員・学生の熱心な取り組みの結果、回答率 8 割を超えることも困難ではなく、その水準を継続できることも示された。これは、調査結果の信頼性を高めることに貢献する。さらに、調査データは個人に紐づけて記録されるため、個人別学修指導の基礎データとして活用できる環境が整ってきていると評価される（学修行動調査では個別のフィードバックを実施済み）。今後は、タイムリーに的確な学修支援が行えるように、調査の種類を超えて項目間の相関分析や個人の時系列分析を進めたい。

本調査の結果、学生は本学で学ぶことに関しては概ね満足していると判断される。ただし、これは外部基準に照らした結果ではないので、自分の所属大学への期待も含めての評価であることも忘れてはいけない。一方、教員・職員への満足度は一定水準で維持されているが、不満群の自由記述から教員・職員へ同じ内容の苦情が寄せられており、対応が急がれる。施設面では、Wi-Fi 環境に関する周知とアクセスポイントの増設、コンビニの設置は、喫緊の課題である。これらについてはキャンパス整備が完了するまで先送りすることは困難であると考えられる。

上記で回答率の高さについては好意的な評価を行ったが、もしもこの調査で明らかになった要望が1つも実現されない場合、学生の調査全体に対する徒労感が高まり、ひいては「大学は学生の意見に真摯に向き合ってくれない」という失望につながるのではないかと危惧する。一つ一つ解決に向けて努力している姿勢を明確に示すことが、大学への信頼向上につながることを確信する。

以上